【WCC 北京　3 日目　種目別決勝レポート】

【鈴木菜巴】
《種目別決勝：クラブ》　7 位
得点：23.600（DB7.1／DA3.2／A7.2／E6.10）

種目別決勝においても気負うことなく、「いつも通り」の演技を行うことを意識してフロアへと臨んだ。
冒頭のリスクでは、個人総合でミスがあった箇所を見事に成功させ、落ち着いた立ち上がりを見せた。しかし、続くフェッテバランスで身体のコントロールがわずかに乱れ、惜しくも落下につながった。
さらに、その後の足受けのリスクにおいても、本来であれば確実に実施できる技であったが、一瞬のタイミングのずれからクラブが足からこぼれ落ちてしまった。
種目別決勝という緊張感のある舞台の中で、普段通りの力を発揮し続けることの難しさを改めて実感する演技となった。一方で、冒頭の課題を修正して成功させたことは成果でもあり、今後は演技全体を通して安定した実施ができるよう取り組んでいく必要がある。

《種目別決勝：リボン》　7 位
得点：23.450（DB5.8／DA3.3／A7.2／E7.15）
クラブ終了後、気持ちを切り替えて最終種目のリボンに臨んだ。
演技全体を通して大きく崩れることはなかったものの、DB の精度に課題が見られた。エカルテバランスやフェッテローテーションではフォームの明確さを欠き、本来獲得できるはずの価値を十分に得ることができなかった。
また、演技終盤のリスクでは手具の軌道が乱れ、不成立となった。体力的にも集中力的にも厳しい状況の中で、最後まで技術の正確性を維持することの難しさが課題として残った。
一方で、3 日間を通して構成変更後の演技を国際大会の舞台で実践し、多くの課題と成果を確認することができたことは大きな収穫であった。
次戦となるワールドカップミラノ大会まで残された時間は限られているが、本大会で明らかになった課題を整理し、一つひとつ改善を重ねながら、更なる得点向上と演技の完成度向上を目指していきたい。

【団体】
《種目別決勝：ボール 5》　4 位
得点：22.800（DB4.9／DA6.4／A6.6／E4.9）
総合での結果を受け、挽回を目指して臨んだ種目別決勝であった。これまでも挽回を意識す

るあまり、本来の力を発揮しきれない場面が見られていたことから、今回は結果にとらわれず、目の前の技術を一つひとつ確実に実施することにフォーカスして試合に臨んだ。しかし、最終的には演技をまとめきることができず、課題の残る内容となった。
冒頭の CR では、春先のワールドカップから追加した 0.1 点のくぐり抜けによる加点を狙ったものの、投げが不安定となり、受けの追加価値を実施することができなかった。それでも前半は比較的落ち着いて演技を進めることができ、全体としてクリアな流れを維持していた。しかし、中盤の 2 つ目の交換において 1 名が落下し、その後立て直したかに見えたものの、続く複数投げでは左に逸れたボールを取りきれず、再び落下が発生した。さらに、落下直後に予定していた CC はタイミングが合わず不成立となり、曲遅れも生じたことで芸術面にも影響を及ぼした。
得点を踏まえると、2 度の落下以外にも難度や実施における不正確さが見られ、点数を取りきれていない要素が多く存在していたと考えられる。
今後は、構成の難度だけを追求するのではなく、選手が本番で確実に実施できる内容へと見直しを図り、まずは演技を最後までまとめ切ることを最優先に取り組んでいく必要がある。
また、難度の実施精度に関する課題についても、本大会を通して改めて明確となった。
加えて、本大会を通じて、技術面だけでなく精神面を含めたチームとしての課題も浮き彫りとなった。一方で、世界選手権前のこの時期に課題を明確に認識できたことは、今後の強化に向けた大きな収穫でもある。

世界選手権までに残された国際大会はあと 1 大会となるが、小手先の修正ではなく、日々の取り組み方や選手を取り巻く環境を一つひとつ見直しながら、チームとしての土台を再構築していきたい。そして、選手一人ひとりが自信を持って演技に臨める状態を作り上げていくことが重要である。
本大会は、世界と戦う上での現状と課題を改めて認識する機会となった。この経験を今後の強化につなげ、世界選手権では日本らしい表現力と実施精度を発揮できるよう、チーム一丸となって取り組んでいきたい。

出場メンバー
田口久乃、西本愛実、花村夏実、田中友菜、眞鍋凛